詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニュース

喜怒哀楽

4-5
Vol.109

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し㈱ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

CONTENTS

寺尾亜真李（新潟県・新潟市）2
写真自分史づくり 3
句集への道 4
「俳句と身体」② **俳人 黒岩徳将** 16

にいがた 食の歳時記 ～越後姫～

今年の冬は、いつもより寒さを感じなかったように思う。それでも、春は待ち遠しいものだ。春を感じるものといえば何だろう?と考えると、「苺」が思い浮かぶ。苺は季語にもなっていて、初夏の分類。で、新潟で苺といえば「越後姫」!「可憐でみずみずしい新潟のお姫様のようなイチゴ」ということらしい。冬の長い新潟でも栽培できるよう開発されたそうだ。比較的大粒で、酸味が少なく甘くてジューシー、柔らかめな果実が特徴。4月がいちばんおいしい季節だ。今では冬でも食べられる（むしろ、冬の方が大々的に売り出されている気がする）が、個人的には、幼いころに食べた、露地ものの、4月～5月の苺が一番おいしかった……と思う。春がきて、新潟に訪れる機会がございましたら、是非ご賞味あれ。

温古知新 61 「菜根譚」33

お家に引きこもりがちなこの頃。せっかくですので、「菜根譚」でもいかがですか？

偏信して奸の欺く所と為る毋れ。自任して気の使うところと為る毋れ。己の長を以て人の短を形す毋れ。己の拙に因りて人の能を忌む毋れ。

（一方ばかり信じ、悪人に騙されてはいけない。自分を過信してはいけない。自分の長所を盾に、他人の短所を暴いてはいけない。自分が劣っているからといって、他人の能力をねたんではいけない。）

主観ではなく、客観的に公平な判断を！

人の短処は曲に弥縫を為すを要す。如し暴きて之を揚ぐれば、是れ短を以って短を攻めるなり。人の頑あるは善く化誨を為すを要す。如し忿りて之を嫉まば、是れ頑を以て頑を済すなり。

（他人の短所は上手にフォローする必要がある。もし短所を暴いて露呈するなら、自分の短所で他人の短所を責めるようなもの。他人の頑なさは上手に諭す必要がある。もし、怒って相手の頑なさを憎めば、自分が頑固なことで相手を頑固にするようなものである。）

沈々と語らざる士に遇わば、且く心を輸すこと莫れ。悻々と自ら好しとするの人を見れば、応に須く口を防ぐべし。

（沈黙して何も語らない人に出会ったら、本心を打ち明けてはいけない。怒りっぽく、自分が正しいと思い込んでいる人には、口を閉ざすのが良い。）

無理矢理他人に強いるのではなく、広い心で接することも大切です。相手の様子を見守り、自分の姿も顧みられるようになりたいですね。

念頭、昏散の処、提醒を知ることを要す。念頭、喫緊の時、放下を知ることを要す。然らざれば、恐らくは昏々の病を去くも、又、憧々の擾れを来かん。

（心が散漫な時は、しっかり目を覚ますことを学ぶ必要がある。心が緊張している時は、それを捨て去る方法を知る必要がある。そうしなければ、ぼんやりした諸々を退けられても、落ち着きの無さを露呈するだろう。）

緊張しすぎず、緩すぎず。バランスが難しい……。

なかなか、すっきり明るい気持ちで！となりづらい雰囲気ではありますが、少しでも皆様の助けになりますよう。（古川久美子）

寺尾亜真李様
『句集 雪の韻』
（新潟県・新潟市）

今年1月に『句集 雪の韻』を上梓した寺尾亜真李さんに、お話をお聞きしました（新型コロナウイルス感染拡大防止のため、原稿を頂戴しそれをまとめさせていただきました）。

Q『句集 雪の韻』は第二句集ですね

第一句集『きちかう』を上木したのがちょうど十年前。傘寿も過ぎ、一つの節目として第二句集を出版したいと思っていた。そんなとき、ちょうど御社のこの「笑顔礼讃西東」のコーナーで「本づくりのススメ」を読み、その言葉に後押しされて決断した。そこで師でもある「銀化」主宰中原道夫氏は「長編は書けなくても、俳句なら自分の一冊を易々と生むことが出来る。句集は自身の決算書としての意味合いがあり有意義」と語っておられた。

Q第一句集を踏まえ意識したことは？

第二句集なので、自選をすること、構成することを楽しみたいと思った。ただ思っていたのとは訳が違い、「易々と」はいかなかった（笑）。中原主宰選と俳句大会入選を加えた千余句の中から二八一句に絞ったが、迷った句が少なからずあった。例えば

金魚玉ぬぐひておくりびとであり

の句は、平成二十一年の作。少し前まで金魚が入っていた金魚玉。それが曇っており、拭っていた時に出来た句。ちょうど、アカデミー賞の映画「おくりびと」が話題になっていたという背景がある。こんにちに通用するかな？と悩んだ末に、入れることに。結果的に、この句は主宰の『雪の韻』十句選に入っており安堵した。

構成では、作句年に関わらず、春・夏・秋・冬・新年の五章とし、より一層自分を晒し、ものがたりになるように配列した。

▲俳号の亜真李はあまり＝余生からつけたという

Q本を手にされた時は？

到着し、思わず抱きしめた。表紙カバーの青の色合いの変化、題字の真っ白ではない白、表紙シルク地の上品なピンク、背文字の銀色の箔押しが何とも素敵で、表紙カバーをつけて佳し、カバーを外し本棚に並べても背の銀の箔押し佳し、と満足であった。

「本」が好きで、日ごろ本屋にもよく行き、小説やエッセイなど一ヵ月に十五冊位は読む。だから、「本」には多少こだわりを持っているが、このたびの句集の紙の色、文字の配置など全体的に満足であった。

▲生まれたのが雪の降り続く朝だったことから『句集 雪の韻』に

Q本を出してみての感想

今回句集を一冊上木することで、三度楽しんだ。一度目は、句選をする中でその句のできた当時の人生を再び味わった。二度目は、初校・二校と完成度が上がって、当初漠然と抱いていたイメージが明確な形になっていく度に、ワクワクした。これも御社の対応がスマートだったから。三度目は、読んでいただいた方から多彩な読みを賜り、俳縁をいただいた。

Q少し句をご紹介ください

春炬燵夫の遺せし未亡人

夫は、四十八歳になったばかりの働き盛りで病没し、息子二人と私が遺された。悲しみの歳月を経て、三十年以上経って出来た句。皆さんから「微塵の暗さも感じられない」との評をいただいた。

黒板に白鳥の数チャイムなる

教員生活が長かった。退職後も俳句指導ボランティアとして地元の小・中・高の学校に関わったので、自然とその辺りを取材した句が出来る。

ギプス巻く素足は淋しさうだから

子どもの頃から病弱だった。後年リウマチになり、今は病気とは仲良く付き合っている。俳句のおかげで自分を客観視することができ、マイナスの体験もプラスに変えてくれている。ありがたいことに、傘寿過ぎの今も元気にしている。

Q今、夢中になっていることは？

花のある暮らしかな。「辛夷が咲いたから見に来ない？」とお誘いがあれば、友人の山小屋へいそいそと出掛ける。また、わが家のちっぽけな庭を「ハッピーガーデン」と名付け、一年中何かしらの花があるように手入れしている。今は紅梅が咲き、椿も蕾がふくらみ、庭の隅では水仙が咲き、雪割草が咲き出した。やがて一輪草も芽を出す。あれこれ眺めていれば余念がない。鈴木真砂女に「今生のいまが倖せ衣被」という句があるが、そんな心境で日々を過ごしている。

『句集 雪の韻』より

代掻きて平和な村をどろどろに
螢の夜はぐれてゐるのとも違ふ
馬耳もちて馬齢すこやか敬老日
炭をつぐそんな断り方もある
無音とは限りなく降る雪の音

★電話口でもお会いしても、いつ何時でも、しゃんとして快活かつ大きな声で「寺尾です」と仰る。ご主人を亡くされてからの月日と激務と病を想像すると、その芯の強さがうかがえる。傍らにあった俳句が、人生の杖としてどんなに励ましであり慰めであったか。一つひとつ自分で決めて、着実に遂行する。めげずに前へ前へ。亜真李とは、余生ではなく余り有る情熱のことと得心した。

（木戸敦子）

いつもは句会・歌会を紹介している「笑顔礼讃西・東」のコーナー。コロナウイルス感染拡大防止を理由に句会も中止が相次いだことを受け、今回は当社がお勧めする「写真自分史」づくりと、「句集への道」をひっそりとスタート。完成までの道のり、どうぞお付き合いください。

写真自分史づくり ～スタッフ松野が祖父の写真自分史の手伝いをします～

0 はじめに

みなさんは写真の整理をどのようにしていますか？アルバムに綴ってはいるけれど、今後のために数を少なくしておいたほうが良いか悩んでいる…。また、自分史を残したいと思うけど、文章を書く時間がない…。そんな方におすすめするのが、写真自分史です！わたくし、松野沙依が、祖父との写真自分史制作風景をレポートし、本誌読者の皆様にお届けいたします！

今回、写真自分史を制作するのは、松野利雄。大正の終わりに生まれ、御年95。大工として50年務め、退職後、現在まで家庭菜園・工芸・養鶏・カメラ・パソコンを趣味に日々大忙し。

● 写真自分史 …
生まれてから現在までの写真を、写真の説明とともに一冊の本にまとめる喜怒哀楽書房の新サービスです。

1 アルバム探し

まず初めに、アルバムを探します。自室のタンスに眠っていたアルバムをさっと見て、よさそうな写真が入っているアルバムをどんどん出していきます。

2 写真を選ぶ

アルバムを見つけたら、次は写真を選んでいきます。並び替えやすいように、いつ撮影した写真か裏にメモしながら、アルバムから抜き出します。平成生まれの孫である私は、着物姿の写真にびっくり仰天！　現代とは別世界とも感じられる日常の写真。思い出や歴史を振り返りながら、大盛り上がりで写真を選んでいきます。

3 デジタル写真選びとプリント

祖父は、写真をパソコンでも管理しているとのこと。パソコンの中に入っている写真も、チェックします。95 歳とは思えない、慣れた手つきで写真をプリントしていきます。

4 写真自分史に載せる順番に写真を並べ替え、通し番号を書く

写真を選んだら、写真自分史に載せる順番に並び替えていきます。家族との写真・仕事の写真・旅行の写真などテーマ別に分類するか、シンプルに年代順にまとめるか悩みましたが、年代順に掲載することにしました。並び替えたら、写真の裏にペンで通し番号を書いていきます。

5 写真の説明を聞きながら、パソコンに入力

写真１枚１枚に、何歳の時か、何をしているか、誰が写っているかなどの説明を書いていきます。祖父は、根っからの理系。文章を考えるのに時間がかかるとのことで、今回は私がヒヤリングし、まとめていきました。兄弟・親戚・家の様子など、長く生きてきた祖父にしか分からないことがたくさん。祖父の歴史と共に、松野家の歴史も繙（ひもと）かれていきました。

今回は、写真の整理から説明の記入までをお届けしました。スピーディーにご紹介しましたが、ここまでに５日を要しています。今後も、どの写真を表紙にするか、自分史のタイトルはどうするかなど、決めることはまだまだたくさん！　祖父は、「考えることがたくさんあるなぁ、それも楽しみだよ」とにこやかに話し、タイトルを決めるべく国語辞典を持って、自室へ向かったのでした。

句集への道（第一回）

―木戸敦子が自分の句集づくりにチャレンジ！

これまでたくさんの句集をお手伝いさせていただきましたが、今回木戸が自分の句集をつくることに。突然のスタート。まだゴールは見えていません。完成までの道のりを、インタビュー形式にてお届けします。

◆句集をつくることになった経緯は？

すべてはコロナウイルスのせい（涙）。取材予定の吟行が中止となり、どうしようと思っていた矢先、菅真理子が涼しい顔で「木戸さんの句集を作りましょう」と！常日頃、お客様にご自身の作品を「本」として残すことは意義あること、とお勧めしているが、いざ自分のこととなると話は別、全く別!!「お客様は何が大変で、障壁になっているのかを知るチャンスですよ」と、ああいえば真理子言う。一大決心ならぬ一大観念をした次第。

◆そもそも、俳句をはじめたきっかけは？

当社社長木戸敏雄が新潟の「夕日キャンペーン」に携わっており、２００３年に「夕日俳句大賞」を始めることに。新潟出身「銀化」主宰の中原道夫氏に選者をお願いするにあたり、少しは俳句を知らないと、ということで果敢にも銀化の句会に初参加。数回参加するも毎回名乗りもなく、句会後に大酒を飲むばかりで自然とフェードアウト。その間、銀化誌の購読は続けるがただのコレクター（中原先生すみません!!）。その玉砕の記憶を引きずりながら、心のどこかで自らの17音字で世界を切り取ることができたらどんなに素敵だろう、という憧れは持っていた。そんな時、中原先生が長岡市で新しく初心者を対象に「信天翁（あほうどり）句会」と称した句会を指導されていることを知り、取材を兼ねて参加したのが２０１５年のこと。

◆現在の俳句とのつきあい方は？

以来５年、毎月第４月曜日、18時12分の新幹線で長岡へ。21時の句会後は、先生ほか６～８人で楽しい宴席。「俳句は耐えることだよ」と慰められる日もあれば、先生の大丸に有頂天になる日も。晴れる日、曇る日、そこにはいつも17音が―などという格好のいいものではなく、行きの新幹線の中で作ったりと相変わらずのドタバタ劇。そんなことだから「いつまでもへったくそだな～」と嫌気がさし、２０１７年２月から自らに一日一句を課した。続けていれば、続けてさえいればきっといつかは、嗚呼…と隔靴掻痒、現在まで一日一句をひねり出し、友だちにＬＩＮＥで送ることを続けている。会社では「ちゃんと俳句を整理していないと後で困るよね～」などとぬかしつつ、己はというと、ＬＩＮＥの画面を後で見直して手帳に書きつけるという、デジタルなんだかアナログなんだかぐっちゃぐちゃ。こんな初回で、大丈夫??

次回、俳句作品の保存の状態や、作品数をインタビューしていきます。句集完成まで一歩ずつ…、ぜひ一緒に見守ってください。

※誌面の都合上、掲載は原則お一人さま1作品とさせていただきます。
今回の投稿作品数は、256でした。
※しめきり 2020年5月15日(金)まで

投稿作品

俳句

1 障子背の温き朝やお仏前
齋藤光雄(新潟県)

2 解除され和して同ぜぬフクシマ忌
福岡　悟(東京都)

3 人は誰も逝く日を知らず春惜しむ
井原毬子(東京都)

4 都鳥光に向きて飛び立てり
檜山柚子香(東京都)

5 時代越え祖母より届く花衣
すずき笑子(東京都)

6 片栗のおいでおいでと角田山
磯部　力(新潟県)

7 寒稽古校庭いっぱいざわめけり
居原田暹(大阪府)

8 水車まだ水を落さず猫柳
坪井研治(東京都)

9 あたたかやシュークリームを頬張れば
松嶋光秋(東京都)

10 山笑ふ山懐に妻と老い
佐野和彦(静岡県)

11 洋上の鰆のうろこ風をよび
佐々木素風(新潟県)

12 たんぽぽの遥かな門出風まかせ
古閑智子(神奈川県)

13 スクランブル交差点より発つ淑気
溝畑万年青(埼玉県)

14 モンゴルは憧れの地よ青き踏む
松尾憲勝(神奈川県)

15 聞こゆるは水の音のみ紅椿
環　順子(東京都)

16 曾孫の生まるる報せ梅ひらく
大谷　茂(埼玉県)

17 身近なる冬の星座や黄泉国(よもつくに)
有坂馨園(福島県)

18 掌に香り転がす蕗の薹
湯浅芳郎(岡山県)

19 禍も福も越えし晩節松の芯
内河邦久(東京都)

20 立春の心うらうら旅の空
川嶋法子(東京都)

21 自家製の目刺朝餉に舟屋宿
天野輝子(東京都)

22 ロカ岬大陸終り野焼かな
島村幸重(兵庫県)

23 繰り返す想定外や狂い花
岩村　昇(神奈川県)

24 魂を揺するじょんがら冬怒涛
三津木俊幸(千葉県)

25 垣越ゆる猫の鈴の音(ね)風光る
小澤円梨(静岡県)

26 雪降り降れ舟唄よろし最上川
上村元義(神奈川県)

27 合掌のつぼみやはらか春時雨
九法活惠(埼玉県)

28 神杉(しんさん)の捧げ銃して山眠る
井上静夫(栃木県)

29 母遺す畑に添ひたる黄水仙
貝瀬光洋(神奈川県)

30 問われしは個々の品格冬薔薇
井田由利子(宮城県)

31 皺や粗茶ですけどと熱々茶
吉里ひとみ(東京都)

32 七草に皺の手合はす願ひあり
本間ミネ(新潟県)

33 をさな児の手にはあめ玉暦売り
本間　進(新潟県)

34 寒牡丹上野なつかし菰うれし
松尾らん(東京都)

35 眠る山一足お先辛夷咲き
西條公雄(埼玉県)

36 慈しむ愛犬の鼻春の色
浦橋渇雪(兵庫県)

37 笑ふ山笑はぬ山や甲斐の里
関山恵一(神奈川県)

38 ウォーキング泥つき葱を抱き戻る
高松玲子(埼玉県)

39 ふつふつと蕾ふくらむ木の芽風
杉原明子(静岡県)

40 潮風に頷きゆるる野水仙
堅田秀子(東京都)

41 河津桜の大き一枝駅トイレ
星　一子(神奈川県)

42 婿舅合はぬ帳尻春愁ふ
長峰正晴(千葉県)

43 わが俳句陳腐月並シクラメン
小島岳青(新潟県)

44 どの人も遠き眼をして囲炉裏端
小林七重(新潟県)

45 鴨の川仲よし夫婦(つがい)雪舞いて
杉本敬治(愛知県)

46 青き踏む恃みの足もそこらまで
日名子春実(群馬県)

47 祖先の碑訪ねる道の犬ふぐり
古谷　力(東京都)

48 牡丹雪貴女のショールは真紅かな
湯浅暉子(石川県)

49 啓蟄や白のボードに先に行く
寺内　佶(埼玉県)

50 恋猫に会へる道また通りけり
二瓶邦枝(埼玉県)

51 初雪やお印ほどにしとやかに
中嶋清子(佐賀県)

52 川沿の芽吹き初めたる遊歩道
中田文子(大阪府)

53 挨拶は会釈するのみ黄水仙
岩田　信(神奈川県)

54 蠟梅のひそひそ話風に乗り
大塚徳子(埼玉県)

55 日もすがら怠惰に揺るる糸柳
髙崎登喜子(東京都)

56 山噴くや新居の庭の沈丁花
坪田勝秀(鹿児島県)

57 華やげる友禅流し加賀の春
鈴木清子(埼玉県)

58 春雨に木舞ひの見ゆる農具小屋
津田卿雲(岡山県)

59 春泥へ深き靴跡残したる
関　誠(新潟県)

60 恩師逝く思い出の曲中学生
坂本暁子(東京都)

61 梅一輪今日咲きそむる真新らし
五十嵐睦博(新潟県)

62 ぽんぽりに透かす親子や花筵
山田富朗(埼玉県)

63 初桜娘にひかれて車椅子
阿部徳夫(宮城県)

64 春来たし齢重ねても心地良し
杉村美保子(岩手県)

65 捨てられぬものに故郷木瓜の花
吉村充治(埼玉県)

66 豆まきの鬼も内なり猫二匹
小田ゆかり(新潟県)

67 お年玉はしゃぎまわる童子かな
原田治男(東京都)

68 早梅や石室あけて父母に逢う
中村康浩(福岡県)

69 星ひとつうるみて春の雨となり
阿部澄江(宮城県)

70 佐保姫の機嫌伺ふ予報官
今井勝子(新潟県)

投稿作品

71 日の差して冬草の青いきいきと　中島光江（埼玉県）
72 春が来た野の花咲きし光り射す　田中惠美子（山形県）
73 放哉忌献茶一枝桜餅　田中　昶（鳥取県）
74 うまそうな果樹より売れし植木市　平林義康（兵庫県）
75 懐かしの彼の日彼の人古雛　大阿久雅子（埼玉県）
76 体操に元気を貰ふ雪の富士　清まさじ（静岡県）
77 暖冬のニュースは告げる春の雪　堀木和子（大阪府）
78 銀杏散り天つく高さ鳥さわぐ　片山茂子（埼玉県）
79 頬なづる参道の風梅ふふむ　宮﨑敏昭（埼玉県）
80 奥庭に凜々しく咲ける寒椿　田村よし（茨城県）
81 初みぞれローズマリーと白共演　髙須　孝（愛知県）
82 固雪（かたゆき）の朝は決まって青い空　田中こづえ（北海道）
83 自分史に記す一年年暮るる　山﨑吉晴（群馬県）
84 へそまがり妻もなかなかまいたち　北野耕兵（千葉県）
85 護摩木投げ太鼓連打や追儺式　津布久信雄（東京都）
86 富士裾野入日染めゆく木の芽風　神　一男（静岡県）
87 ニンジンもハートで煮えるバレンタイン　若月理依子（新潟県）

88 気嵐に煙る海峡北の島　梶　鴻風（北海道）
89 羽音無く忍者のごとく冬鴉　藤井春三（埼玉県）
90 杖の身に木枯し容赦のなかりけり　倉沢ひとみ（静岡県）
91 深山は幽（かす）かに青み春近し　井上氣海（広島県）
92 行く春やオリンピックを心待ち　松前邦広（千葉県）
93 地球儀にかすかな傾ぎ余寒なお　望月哲土（東京都）
94 古民家の赤い毛氈雛の宿　金子範子（高知県）
95 かたくなに一人暮しや春の宵　青木ケン子（埼玉県）
96 ハッピー九十二歳竜天に　大窪美代子（大阪府）
97 しみじみとお袋の味煮大根　渥美　保（滋賀県）
98 掃き終へし庭の乱るる落椿　間森　坦（兵庫県）
99 蜆汁濁して啜る朝餉かな　重原爽美（新潟県）
100 都忘れ単身赴任早や四年　小泉芝雲（千葉県）
101 大寒に庭に箒目山笑う　鏡たか子（山形県）
102 野仏の頬を撫で行く花菜風　本庄準也（埼玉県）
103 消え残るベテルギウスや春の雪　中川義彦（新潟県）
104 鳥も子も花のじゅうたん駆けめぐる　高野ほづ子（千葉県）
105 見えぬもの国を動かしマスクかな　多田文代（東京都）
106 マクベスの孤独ミモザの花ざかり　佐山苑子（神奈川県）

107 復元の荷風の書斎春ひなた　桜井葉子（千葉県）
108 鎌倉の谷戸のこぶしも龍太の忌　中澤寿美（神奈川県）
109 利根別川氷下にひそむ流れかな　堀田寿美子（北海道）
110 梅の香を残し散りゆくはらはらと　長谷部喜代子（大阪府）
111 下ネタを楽しく喋る春炬燵　若林卓宣（三重県）
112 老いてなほ夢追ふ心寒椿　竹本芙美子（新潟県）
113 ほほに風　花みどりより先に着き　松島章子（兵庫県）
114 鳥帰る次は羽黒の塔めざし　こんくにを（東京都）
115 クレヨンの青にぎる吾子春日和　内藤紀子（埼玉県）
116 桜えび碧の瞳と瓜二つ　齋藤博洋（秋田県）
117 雛八羽チャボの家族に春の土　橋本　絢（東京都）
118 幼な顔風船ゆれて風感じ　堀口一伸（埼玉県）
119 溜池の山陰群れる春の鴨　中岡宗治（三重県）
120 病み疲れのクルーズ船よ雁帰る　清水君江（埼玉県）
121 花園は水曜休み春彼岸　白戸麻奈（東京都）
122 老夫婦二人の店の豆ひいな　山里倫子（静岡県）
123 洪水の狼籍露はだれ雪　安田芳江（茨城県）
124 寒晴れや点となりゆく鳶のかげ　柴田恵美子（北海道）

125 居場所ある日々の暮しや合歓の花　永田歌子（埼玉県）
126 春愁と花粉をはらひ夕星よ　羽深そら（埼玉県）
127 初釜や師は車椅子やさしかり　中山日出子（大阪府）
128 金婚をともに祝うて内裏雛　伊藤　修（埼玉県）
129 下の子の丈より下へ豆を撒く　椋本望生（大阪府）
130 おぼろ夜の電子辞書より出づる音　阿部昭子（埼玉県）
131 あちこちの雫七色春時雨　大倉壽子（岡山県）
132 水温む婦唱夫随の在るがまま　村山徳英（埼玉県）
133 南座を出で川風の夕桜　一瀬正子（埼玉県）
134 雛壇の鏡台覗く映る顔　光成高志（千葉県）
135 冴返るみぞれの中の開花宣言　増田公代（東京都）
136 うららかや貧乏神も浮かれ出し　髙垣勝代（大阪府）
137 菜花の黄鬱というもの取り払う　仁藤ひろじ（埼玉県）
138 自転車の花人にとふどちらまで　矢野紀子（兵庫県）
139 乗客は中流の顔春うらら　早乙女文子（埼玉県）

短歌

140 失態す母を叱りし母の日は幾年経るも懺悔の日なり　黒澤正行（福島県）
141 高校の受験発表待つごとく予備校誘（いざな）ふチラシの数多　夏井寛治（新潟県）

142 句集照らす一字一句の煌めきて一
気に読みて座右に置けり
土屋喜雄（山梨県）

143 言の葉のなぜか無力の世となれり
歌想練る夜の年の明けつつ
中沢敬子（千葉県）

144 暖冬の雪ない庭に陽がさして枯芝
への中に若草が見ゆ
渡部美代子（山形県）

145 満たされし日々の生活（たつき）の隙間風コ
ロナウイルス寒空を惑ふ
内藤明子（東京都）

146 石膏は心臓と貝血管の樹林がバン
ザイ鹿の角への
安部　哲（新潟県）

147 湘南を独り旅する二宮は富士を背
にして菜の花咲きぬ
木村徳夫（東京都）

148 節分草枯れ松葉積む日のかげに春
はすぐよと白く群れ咲く
石尾曠師朗（東京都）

149 春雷にしずかに開く貝の口おひな
まつりに膳を整え
合田浩子（茨城県）

150 兄弟の仲も父母のあればこそ欲が
匂えば修羅場へ転ぶ
濱崎祥子（鹿児島県）

151 偽りの安倍首相答弁に世の乱れ増
す官邸政治　早坂紘司（北海道）

152 政治家は脱原発と思えども目には
見えない柵も有りたり
濵田イサオ（福岡県）

153 竜田川橋のらんかんたたくたび鯉
集まりて川面に口あく
森　由恵（奈良県）

154 百歳の恩師なる方短歌詠み矍鑠（かくしゃく）と
して一人暮せり
峯岸信子（東京都）

155 情報を隠蔽し操作する恐さ新型ウ
イルス拡散止まず
桑原謙一（群馬県）

156 血圧の高きをやめる我が夫（つま）に鉢の
もみじを部屋に集めり
本田智恵子（東京都）

157 過去の手術（オペ）十三回を記述して健康
診断ようやく終わる
寒川靖子（香川県）

158 濁り取り右目のレンズ入れ換えて
見る大空は透明なブルー
関原幸子（東京都）

159 稔りある人生でしたと云いたいが
忍耐我慢程程にして
田中豊恵（新潟県）

160 被災地にそれぞれの訳ありて建つ
姿に告げる励ましの声
守安幹男（岡山県）

161 元気よく急行電車の行き去（す）ぎる曇
り空なる田畑の中を
高橋登志子（新潟県）

162 夢だった豪華客船世界旅ウイルス
襲う恐怖を憂う
坂元正憲（東京都）

163 初春の清しき空気吸いながら野道
を歩む至福のひととき
西山知子（岡山県）

164 雪吊りを解かれる木々は幹を出す
今年の冬は汗をかいたね
大鳥居牧子（東京都）

165 障害の有無や程度で人間の命の価
値が変わることなし
早坂保文（宮城県）

166 穏やかな令和の年に唸る春風（かぜ）自然
の恵忘れたこころ
木村　舳（山形県）

167 父逝きて姿は見えねど今ここに消
えぬ命でわれを見守る
津山和照（広島県）

168 おうおうと語りかける乳飲み児
はわれを見つめて瞳かがやく
野木宗信（奈良県）

169 幹からは数百年の声がして庭の老
梅一輪咲きおり
相馬　純（新潟県）

170 紐とけばことりとひなの目ざめを
りぼんぼり灯せど孫は嫁ぎし
冨樫佐與子（新潟県）

171 子の墓にまた来るといいつくし道
しくと目に触れ穂は空に発ち
小川　暘（大阪府）

川柳

172 万引もあろうにどうぞ自動ドア
木村洋一（新潟県）

173 いいじゃない桜見たって日本人
細川光子（栃木県）

174 責任は取らずなんでも官邸団
橋本世紀男（東京都）

175 つまずいたお陰で読みが巧くなる
鈴木義雄（福島県）

176 さまざまな支えに感謝する命
小山恵美子（大阪府）

177 長生きで家族と共に想い出を
大橋絵代（千葉県）

178 人生はいつも方法序説かな
原　崇雄（埼玉県）

179 今夜また嬉しい明日が来る眠り
目黒豊光（福島県）

180 くらしかえ転ばぬ先の杖とする
守屋高雄（岩手県）

181 二千万なくて暮らしを小さくし
締次直代（岡山県）

182 咳一つ待合室は厳しき目
青木日出男（群馬県）

183 自分史へ小さな嘘が隠し味
近藤富夫（東京都）

184 老二人懐炉並の余熱です
岩崎弘舟（岡山県）

185 ウイルスに政府危うし舵を切る
齊藤安弘（神奈川県）

186 顔を見て若い若いとクラス会
長谷川庄二郎（千葉県）

187 春一番洗濯物が肩組んだ
奥那於子（大阪府）

188 ひと言に返事が十言（とこと）二十言
丸山芳夫（東京都）

189 今時代民間金さんお白州で
佐伯セツ子（香川県）

190 コロナ菌オリンピックにみずをさす
久保壽雄（北海道）

191 難問に挑むにたりフォト一句
宇都木安子（東京都）

192 理屈は捏ねるがスマホに弱い
和﨑治人（山口県）

193 米寿間近余力を生かし句を捻る
久本にい地（岡山県）

194 郵政民営化（改革）は愚作でしたね小泉氏（さん）
伏見の馬酒（京都府）

※前号投稿作品179番久本にい地様の作品に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

誤　激動の昭和を生きて米寿逝し行
　　方知らずに令和を歩む
正　激動の昭和を生きて米寿近し行
　　方知らずに令和を歩む

投稿作品

フォトイック

こちらの写真を見て詠んでいただきました。

（写真提供：伊丹三樹彦さん）

195 風船のひも長すぎてもてあまし　齋藤光雄（新潟県）
196 かしこしく香（にお）へ少女（おとめ）の風薫る　福岡　悟（東京都）
197 風船を弾けるまでにふくらす娘　井原毬子（東京都）
198 顔よりも大きな風船踊り出す　橋本世紀男（東京都）
199 風船を追って少女お手玉に　居原田暹（大阪府）
200 風船や童女の顔をかくすほど　佐野和彦（静岡県）
201 影おもしろい特賞とった写真　小山惠美子（大阪府）
202 引き返すきっかけほしい影法師　川嶋法子（東京都）
203 春日燦影に尻尾のある少女　有田裕子（北海道）
204 息入れてゴム風船と走りゆく　小澤円梨（静岡県）
205 思ひ通りにゆかぬ風あり光をり　九法活惠（埼玉県）
206 放たれし風船肩に帰り道　井田由利子（宮城県）
207 春風にのって身も心も軽々と　渡部美代子（山形県）
208 いとしげに影とあそぶ児春うらら　本間　進（新潟県）
209 夏帽子じゃまになります元気な子　堅田秀子（東京都）
210 しゃぼん玉影にもふわりくっついて　星　一子（神奈川県）
211 開会式風船降りてきし少女　安部　哲（新潟県）
212 風船影は仲間でないと影法師　長峰正晴（千葉県）
213 ガム遊び風船大きく前へ見えず　青木日出男（群馬県）
214 春日燦走れば走る己が影　日名子春実（群馬県）
215 ふくらむね来来の夢と影帽子　大木和男（埼玉県）
216 風船をもって少女はひと踊り　寺内　佶（埼玉県）
217 ついてくる等身大の私の影が　岩崎弘舟（岡山県）
218 ゴム風船私の影を膨らます　髙崎登喜子（東京都）
219 風船をはなすまじとす少女かな　鈴木清子（埼玉県）
220 さいならさんかくふらここの揺れ残る　津田卿雲（岡山県）
221 風船も影と一緒について来る　関　誠（新潟県）
222 太陽の下にいっぱい生かされて　五十嵐睦博（新潟県）
223 風船娘先頭を行く影従えて　合田浩子（茨城県）
224 未確認物体この球体は何でしょう　濱崎祥子（鹿児島県）
225 お友達日が暮れるまで遊ぼうね　阿部德夫（宮城県）
226 春風に夢をのせてる少女かな　齊藤安弘（神奈川県）
227 あら不思議もしかしてこの人私なの　阿部澄江（宮城県）
228 同行の二人一人影法師　長谷川庄二郎（千葉県）
229 風船は影も透明子と跳ねる　大阿久雅子（埼玉県）
230 華麗なる春陽捕らふ影法師　片山茂子（埼玉県）
231 子犬より風船つれてお散歩に　奥那於子（大阪府）
232 ふてくされ風船の子は付いて来る　山﨑吉晴（群馬県）
233 お昼だね高さ同じお友達　佐伯セツ子（香川県）
234 風船や少女を連れて風光る　関原幸子（東京都）
235 好天気バルーンだったら飛べるのに　田中豊惠（新潟県）
236 風船と遊ぶ午後の日濃かりけり　神　一男（静岡県）
237 子の影が犬となりゆく蜃気楼　梶　鴻風（北海道）
238 天日や見てみてと急かす娘かな　藤井春三（埼玉県）
239 この影絵何に見えるか考える　松前邦広（千葉県）
240 影踏みの幼な友達みんな逝き　守安幹男（岡山県）
241 風船と遊ぶ少女や影濃ゆし　大窪美代子（大阪府）
242 幼なごの風船高く散歩する　髙橋登志子（新潟県）
243 怪獣の様な影絵やシャボン玉　鏡たか子（山形県）
244 風船や少女の駈くるシルエット　本庄準也（埼玉県）
245 黄ふうせん飛ばす少女に風薫る　宇都木安子（東京都）
246 イベントの風船もらって影ふまず　和﨑治人（山口県）
247 ふくらんだ夢を大事に少女翔ぶ　久本にい地（岡山県）
248 影法師自分の影と遊んでる　西山知子（岡山県）
249 風さんいたづらしないで見えないよ！　大鳥居牧子（東京都）
250 影連れて少女は白の夏帽子　若井令子（兵庫県）
251 節分や微笑を浮べる日陰にも　五味田幸夫（東京都）
252 風船とをみなのチャチャチャ街うらら　清水君江（埼玉県）
253 ふうはふは口に風船遊ばせて　椋本望生（大阪府）
254 大丈夫しっぽ出てない春うらら　小川　暘（大阪府）
255 バレリーナ夢見る少女や春の風　沖　惇子（大阪府）
256 これまでもこれからも二人の影は一つ　白松いちろう（千葉県）

俳句・川柳募集!!

右の写真から、自由にイメージし五七五（俳句か川柳）で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております！

（写真提供：伊丹三樹彦さん）

2-3月号の心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。
※大賞と自句自解コーナーは年１回です。

年間大賞（令和元年）

※今回、昨年一年間で読者のみなさまからジャンルを問わず、一番票の多かった方を年間大賞として発表します。

〈殿堂〉

●俳句

七人の敵は老いたりおでん酒（2月号）
ひらがなのやうにやはらか春の雪（4月号）
関山恵一（神奈川県）

※関山様は前年度も大賞だったため二年連続受賞です！殿堂入りおめでとうございます！

〈大賞〉

●俳句

本棚はタイムカプセル土用干（8月号）

川口　襄様

川口　襄（埼玉県）

〈受賞のことば〉

私の書斎の本棚の片隅に、一冊の新約聖書と讃美歌集が眠っている。黒表紙、文語体の小型の本で表紙裏に「一九四七年三月みどり幼稚園　贈川口襄様」と添書あり。私が通っていたキリスト教系幼稚園の卒園式で園長先生から戴いたもの。挟み込まれたセピア色の写真には、クリスマスの劇で私がヨセフ役を演じた舞台が映っている。

あれから七十有余年、何度かの引越しで当然行方不明になっている筈の聖書が見付かったので、早速虫干しをして改めて読み返してみた。あの頃のことが鮮やかに蘇る。これ将にパンドラの箱。全て本棚と神の思し召しのお陰であろう。

●川柳

年を取るって初めてで難しい（10月号）
丸山芳夫（東京都）

丸山芳夫様

〈受賞のことば〉

アンテナを立てて

大賞に選んで戴き、有難うございます。

この句は、テレビで誰かが「老いるのって初心者で…」と話していたのが心に引っかかり、その時メモしておいたのを後で手直ししたものです。

句材はどこにでも転がっているもの。それに気付くよう、川柳のアンテナが錆びないよう、聞き耳を立てて生きて行こうと思います。そうすれば毎日を二倍楽しめるのでは…。

2-3月号の心に残った作品

◎川柳部門

17 IR予想のとおり汚職生む
石尾曠師朗（東京都）

・横浜市民としてはIR反対!!　古閑智子（神奈川県）・当初から荒れ模様、今後の進展が心配　守安幹男（岡山県）・やっぱり！役得バッチリ、しょうもない与党議員の多いこと　安田芳江（茨城県）

◎俳句部門

102 水路掘る医師の訃報や寒昴
こんくにを（東京都）

・見知らぬ国でこれ程迄に貢献した方がいたとは。何とも痛ましい思いとともに広く知らしむべきとの思いです　貝瀬光洋（神奈川県）・未開の国で尊い仕事に従事した日本人医師の突然の死、悼みます　堀木和子（大阪府）・命がけで仕事をしていた医師の死をもって行き場のないこの気持ちは私だけではないと思う　金子範子（高知県）・良き事も理解してもらえぬ遠き國　青木ケン子（埼玉県）・中村哲先生の凛とした生き方に深い感動。寒昴の季語がピッタリ　渥美保（滋賀県）ほか

147 菜の花やをさなさのこるおよめさん
内藤紀子（埼玉県）

・最近はなかなかおめにかかれないおさなさののこる嫁さんに初句の「菜の花や」がよく効いている　夏井寛治（新潟県）・季語が効いていますのと作者のやさしさを感じました　鈴木清子（埼玉県）・おさなさのこるおよめさんとひらがなでの表記が宜しく、ほほえましい情景がよく表出しておりますね　吉村充治（埼玉県）・中七・下五のひらがな表記に暖かさを感じます　平林義康（兵庫県）・初めはみんなそうでした、お嫁さんはみんな可愛いくて一緒に笑えます。いざそれからは？　佐伯セツ子（香川県）・ひらがなが良いですね。〝およめさん〟の姿が菜の花に託されています　一瀬正子（埼玉県）

◎短歌部門

189 幸せは人それぞれの形あり「今が幸せ」夢かなわずも
岩﨑令子（大阪府）

・幸せは人それぞれに違うかも知れませんが「今が幸せ」そんな気持ちです　中沢敬子（千葉）・平凡が一番　石尾曠師朗（東京都）・世のゆく末、うれいていれどきりがなし　齊藤安弘（神奈川県）・最近知人が亡くなり改めて生きている事の幸せを感じます「今が幸せ」今日一日生きる事が一番　阿部澄江（宮城県）・そうだよなと素直に受け止められる気負いのないところがよい　早坂保文（宮城県）

◎フォトイック

今回大賞はありませんでした。

◎他にも

20 つつましく母の遠忌や風花す
環　順子（東京都）

29 人が住まぬ家また一つ冬深し
中嶋清子（佐賀県）

30 炭二つ足して笑顔の雪達磨
浦橋渇雪（兵庫県）

50 日向ぼこ長寿の先にある不安
井原毬子（東京都）

68 未来より今が大事と老いの冬
杉村美保子（岩手県）

111 霜焼や母のまじなひ欲しき夜
一瀬正子（埼玉県）

160 中村さんにあげたかったな平和賞
ほしがるひとにあげたくはない
黒澤正行（福島県）

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート 私が使っている こんな便利なもの

●文房具

・ペン修正液　齋藤光雄（新潟県）
土屋喜雄（山梨県）
青木日出男（群馬県）
・修正テープ　今井勝子（新潟県）
天野輝子（東京都）
・訂正ラベル。原稿などの訂正に　寒川靖子（香川県）
・パイロットの万年筆　居原田暹（大阪府）
・ウォーターマンの万年筆　古谷　力（東京都）
・万年筆のカートリッジ式になっている筆ペン　和﨑治人（山口県）
・消せるボールペン　仁藤ひろじ（埼玉県）
本庄準也（埼玉県）
岩崎弘舟（岡山県）
目黒豊光（福島県）

・四色のあるボールペン（一本で）　高橋登志子（新潟県）
・ボールペン、シャープペンになるペン　岩田　信（神奈川県）
・ポストイット。気のついたことのテーマだけをかいておく　原田治男（東京都）
・マスキングテープ。壁にはっても跡が残らない　すずき笑子（東京都）
・4Bの鉛筆　中沢敬子（千葉県）
・紙。これがなかったら大変　白戸麻奈（東京都）
・針なしホチキス　関山恵一（神奈川県）
・手造りメモ用紙　杉本敬治（愛知県）
・青色スティックのり　古閑智子（神奈川県）
・消しカスのでないコロケシ　桑原謙一（群馬県）
・消しゴム滓回収車　貝瀬光洋（神奈川県）
・手帳の年齢早見表　五味田幸夫（東京都）
・セルロイドの筆入れ　渡部美代子（山形県）
・切抜ナイフ、消しゴム　田中　昶（鳥取県）
・折り畳み式はさみ　有田裕子（北海道）
・ペーパナイフ　大阿久雅子（埼玉県）
・日記帳　松尾正一（岩手県）
・紐つきボールペン及び単語カード入りファイル　有坂馨園（福島県）

●バッグ

・小さくたためる買い物袋　倉沢ひとみ（静岡県）
・Shupattoのエコバック　一瀬正子（埼玉県）
・俳句手帳入れポシェット　光成高志（千葉県）
・古くてボロいリュックサック！いくつも持っているのにこればっかりが背中に張りついて離れない　井原毬子（東京都）
・筆記用具が多く入る布製バッグ　津田卿雲（岡山県）
・筆記用具・老眼鏡・電子辞書等が入っているバッグ　井上静夫（栃木県）

●飲食グッズ

・百円少々で売っているペットボトルに入った水　檜山柚子香（東京都）
・小さき水筒　清まさじ（静岡県）
・のどアメ。宅急便の人や俳句大会等で人にあげると喜ばれる　橋本世紀男（東京都）
・使い捨ての紙コップ　湯浅暉子（石川県）
・使い捨てのワリバシ　阿部澄江（宮城県）
・すべり止めの布。ペットボトルの蓋を開ける　片山茂子（埼玉県）
・一口チョコ持ち歩き　髙須　孝（愛知県）
・携帯用ウイスキー小瓶。スキットル　こんくにを（東京都）
・ペットボトルキャップコップ　小川　暘（大阪府）

●孫の手

・孫の手　髙垣勝代（大阪府）
・竹製の孫の手　上村元義（神奈川県）
・引き伸ばすミニ孫の手　宇都木安子（東京都）

●衛生用品

・タオルハンカチーフ　環　順子（東京都）
・小さいアルコール消毒綿　九法活惠（埼玉県）
・フェイシャルペーパーを折りたたんでマスクに秘める　安部　哲（新潟県）
・耳かき　濵田イサオ（福岡県）
・ハンカチ、ミニティシュ　田村よし（茨城県）
・携帯用除菌液　内藤紀子（埼玉県）
・ウェットティッシュ　相馬　純（新潟県）
・布製マスク。内側がシルクで外側はリネンというすぐれ物　有島和子（東京都）
・固い皮膚を切るハサミ　羽深そら（埼玉県）
・デイサービスで仕事する日は爪切りをポケットに。お年寄りは自分で爪は切りにくいものです　金子範子（高知県）

●健康グッズ

・ベッドの脇に歩行器。手軽に屈伸運動　日名子春実（群馬県）
・簡易血圧計。どこでも朝昼夕測れる　原　崇雄（埼玉県）
・ドクターエアー。メタボ、フレイル予防にお任せ　大橋絵代（千葉県）
・プロポリスと香醋、青汁　五十嵐睦博（新潟県）
・歩数計。一日の行動の目安に　堅田秀子（東京都）

●拡大鏡

・うすい小型の拡大鏡　内河邦久（東京都）
・小さなルーペ　湯浅芳郎（岡山県）
・大きな拡大鏡　峯岸信子（東京都）
・シニアグラス　若月理依子（新潟県）
・ハズキルーペ。新聞の字が読みやすくなった　杉原明子（静岡県）

●老眼鏡

・眼鏡ストラップ　伊藤　修（埼玉県）
・軽くて小さい老眼鏡　小澤円梨（静岡県）

●カード類

・Suica。電車、バス売店の他商店でも買い物ができる　松前邦広（千葉県）
・ポイントもつくのでとても便利　関原幸子（東京都）
・電車のカード入れ。バッグの持手に通しておくと遠くからタッチできる便利　中山日出子（大阪府）

●キッチングッズ

・爪楊枝　山田富朗（埼玉県）

・フリーサイズの蒸し器。伸縮自在なスグレモノ　小林七重（新潟県）
・ヨーグルト製造器　岩村　昇（神奈川県）
・鍋帽子。もう一つの火口として台所で活躍　大倉壽子（岡山県）
・台所の菜切り包丁。研ぐのが楽しみ　村山徳英（埼玉県）
・一番は電子レンジ　小山惠美子（大阪府）

●掃除グッズ

・お掃除シート　伏見の馬酒（京都府）
・茶ガラ（ほうきでたたみ掃く時）、オカラ（板の間のふきそうじ）　合田浩子（茨城県）
・アクリル毛糸で手の平サイズに編んだ「アクリルタワシ」　高松玲子（埼玉県）

●防災グッズ

・首下げの非常用ライト。普段も枕元に　渥美　保（滋賀県）
・小さな懐中電灯　中田文子（大阪府）

●広告の裏

・「天声人語」をその日のチラシの裏白に書く　松尾らん（東京都）
・新聞広告の裏を利用して句を作る　稲葉民雄（千葉県）

●その他

・革製の小銭入れ　石尾曠師朗（東京都）
・小さな財布。小銭に回数券、診察券、メモ、鍵、孫にもらった飾り　浦橋渇雪（兵庫県）
・ルーペ付き卓上電気スタンド　齊藤安弘（神奈川県）
・クリップタイプの「キーホルダー」帰宅してごそごそさがさずにイライラしません　中澤寿美（神奈川県）
・ＬＥＤの電気スタンド　濱崎祥子（鹿児島県）
・電子辞書　鈴木義雄（福島県）　山﨑吉晴（群馬県）　望月哲土（東京都）

・１２０ccの水筒。毎日の散歩に欠かせません　川嶋法子（東京都）
・手のひらに入るラジオ。毎日ウォーキングの友です　坪田勝秀（鹿児島県）
・星山散歩、携帯ワンカップ　北野耕兵（千葉県）
・スマホに出無い相手へのＳＭＳ機能　中川義彦（新潟県）
・携帯電話。でもまだ十二分に使いこなせません　神　一男（静岡県）
・キーライト。小型フラッシュライトにも使える　堀口　伸（埼玉県）
・きもの用のピンチ　小田ゆかり（新潟県）
・コード50センチの３口コンセント　中村康浩（福岡県）
・マジックハンド。駐車券を取るとき便利　井上氣海（広島県）
・花瓶の水測定　夏井寛治（新潟県）
・記念切手　津布久信雄（東京都）
・ワイヤレスイヤホン　椋本望生（大阪府）
・首に巻く日本手拭い。冷暖房、手拭き、血止め用途多　中岡宗治（三重県）
・金属製の巻尺　守安幹男（岡山県）
・古くなった「ネクタイ」首にまくと寒さを防げますよ　三津木俊幸（千葉県）
・妻の作ったペットボトルのカバー　久保壽雄（北海道）
・除草剤。次々生えて来る雑草に追われる日々　田中豊恵（新潟県）
・自転車　藤井春三（埼玉県）
・小さい栓付きオイル瓶　奥那於子（大阪府）
・布団型のシュラフを家で使ってみたところ暖かくコンパクトでなかなかいい　中野こと葉（愛知県）
・昔ながらの液晶式電卓　白松いちろう（千葉県）
・１００円ショップで売っているコーヒーカップ程のかわいい鉢　早坂保文（宮城県）
・大昔「大越後展」で求めた大きな握り鋏　吉里ひとみ（東京都）
・朝昼夕用薬区分箱。忘れずに服用でき便利　長峰正晴（千葉県）
・風呂敷　溝畑万年青（埼玉県）
・旅行先で購入した小さな手鏡を３、４ヶはバッグの中へ　井田由利子（宮城県）
・毛糸で編んだ人形をかぶせたトイレットペーパー。これがティッシュ代わりになる　吉村充治（埼玉県）
・郵便の封書の目方を計るハカリ。吊るすだけで目方が分かる優れモノ　長谷川庄二郎（千葉県）
・葉書ホルダー　張山てる子（東京都）
・『五體字類』西東書房　早坂紘司（北海道）
・小さくて可愛らしい湯タンポ　髙崎登喜子（東京都）
・カバンの中で整理ができる小さな袋　大鳥居牧子（東京都）

便利グッズとして多くの方が挙げていた「文房具」。創業以来、紙を通してお付き合いのある、文具の取扱いも行っている田村紙商事㈱の明間さんに、最近の文房具事情についてお書きいただきました。

ホチキス

田村紙商事㈱　営業部仕入課　課長　明間　淳

ホチキスと聞けばみなさん資料などを綴る文房具だとお分かりになると思います。アメリカで作られたＥ・Ｈ・ホチキス社のステープラー（本来の名称）をモデルに生産されたことから、ホチキスと呼ばれるようになったとのこと。この十年で文房具もすごい進化を遂げています。ホチキスもその一つ。私が仕事をする中でホチキスを使う機会はほとんどありません。今使用しているものは、コクヨの金属針を使わない「ハリナックス」。綴じ穴を開け切り込みに差し込むタイプと紙を圧着するタイプがあり、針を外さなくてもいいので古紙回収の際とても便利です。とはいっても、製本する場合や大量に綴る場合などホチキスが必要な場合も多くあります。様々なものが進化を続けるなか、従来の使い方と便利になるものを上手に使い分けていきたいものです。私の住む新潟市でも多くの町の文具屋さんがあります。お気に入りの文房具を探しに出かけたいですね。

編集室だより

生きているといろんなことが起こります。一日の中でもあんなこと、こんなこと、ほんといろいろとありますね！ そんな日常に転がる喜怒哀楽を、編集室よりお届けします。

豆まきをしました

2月3日節分。社内で豆まき大会が開催されました。木戸から「ハイッ！豆まきだよー」の声がかかり、部屋の奥から入口にかけて、鬼役のスタッフに向かって豆をまきます。

鬼の面をつけたデザイン担当の2人。いつもは本の装丁をメインに手掛けています！
豆をまくのは厄年と年女の3人。でも途中から関係なく、鬼も豆をまいていた様子(笑)。まかれた豆は１つ残らず拾い、皆に同じ数だけ配られました。皆さんにも福が訪れますように。

暖冬でしたね

今年の冬は暖かかったですね。こちら新潟も雪はほとんど積もらず。

こんなふうに白くなったのは、たった二度ほど…。いつも「雪はもういい」なんて言っていましたが、いざ降らないとさみしいものですね。

月1回の勉強会

毎月1回、『理念と経営』という経営誌を読んで、設問に応じて考えや感想を一人ずつ発表する勉強会を行っています。2月は、「お客さまにとってどんなサービスがあると、本づくりを楽しめると思いますか？」という設問がありました。
◇お客さまに実際に本を作っていただく、本づくり体験講座を開く
◇表紙や本文のレイアウトやフォントなどをお客さまが選びやすくする
◇面白い素材で本を作れるようにする
◇本を作りたい！行きたい！と思えるような文化的でおしゃれな工房のようなものが出来たら…
などの意見が出ました。お客さまに本づくりを楽しんでいただくために、夢は大きく、かなえるためには地道に、励んでまいります。

カンパのお問い合わせ、ありがとうございます

「こちらの情報誌はおいくらですか？」「まだ振込をしていないのですが…」等のお問い合わせやカンパのお申し出を複数の方からいただいております。温かいお心遣い有難く、心よりお礼申し上げます。
本誌は、101号（2018年10−11月号）より、ご希望の方へ無料でお送りをしております。お知らせが不充分でご心配をおかけし、申し訳ございません。
無料化した本誌を継続するための基金として、以前に送料の振込先として利用していた郵便局口座をカンパの受付先とさせていただいております。
一口いくら、などの設定はございません。もし、ご支援いただけます場合は、こちらへお願いを申し上げます。
ゆうちょ銀行口座名　株式会社ミューズ・コーポレーション
店番059　店名〇五九店
記号00530-4　番号081370
皆様の応援・お力で本誌「喜怒哀楽」を発行できますこと、心より感謝申し上げます。

お子様の絵を本にするサービス「Hug」(ハグ)、第1号が進行中

前号にてご紹介した「Hug」に待望のお客様が。ありがとうございます！　早速、お送りいただいた素敵な作品の数々。

きっと素晴らしい本になります、仕上げます。
お子様に限らず、大人の方の俳画、油絵、水彩画等々ももちろんお手伝いさせていただきます。ご用命ください。

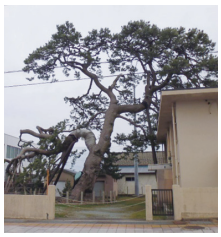
NMMC Niigata Memorial Museum of Culture
にいがた文化の記憶館
〒950-0088　新潟市中央区万代3-1-1
新潟日報メディアシップ5階
TEL：025-250-7171　FAX：025-250-7040

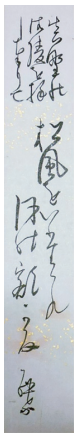
にいがた文化の記憶館便り(31)

佐渡を訪れた文化人
尾崎紅葉―島外に初めて佐渡を紹介

伊豆名（いずな）　皓美（ひろみ）

尾崎紅葉


紅葉が命名した「村雨の松」（佐渡市両津夷）


尾崎紅葉の俳句短冊「真野の御陵を拝し奉りて松風をいたゞく汗の額かな」

にいがた文化の記憶館では、四月三日から七月五日まで、企画展示「佐渡を訪れた文化人―山本家コレクションより」を開催します。明治以降に、佐渡の歴史や自然を慕って海を渡った文化人たちを紹介する企画展です。

明治時代に武家政権から天皇親政になると、佐渡郡真野村（現佐渡市真野）の順徳天皇火葬塚（真野御陵）が脚光を浴び、参拝のために佐渡を訪れる人が多くなりました。渡島文化人の多くは、佐渡奉行の本陣を担い、真野御陵の管理保全に重要な任を担う山本家の丁寧な案内を受けました。彼らは佐渡で作った短歌や俳句を、山本家で書き残しました。

展示で紹介する主な文化人の中から、本稿では尾崎紅葉（一八六八～一九〇三）を紹介します。

尾崎紅葉は、『金色夜叉』で知られる明治を代表する小説家です。療養のため、明治三十二（一八九九）年七月から約一か月間佐渡に滞在しました。当時三十一歳でした。佐渡各地を訪れて佐渡の人々と交流し、このときの見聞を読売新聞に連載しました。これは後に『煙霞療養』にまとめられました。紅葉の記述は、広く刊行された最初の佐渡紹介であり、島外の人々だけでなく、佐渡の人々にとっても佐渡の発見となりました。

佐渡に着いた紅葉は、まず両津で二泊しました。この時、両津橋近くのクロマツの巨木が波のしぶきに濡れるのを見て「村雨に濡れる風情あり」と言い、ここから、このマツは「村雨の松」と名付けられました。現在、県の天然記念物に指定されています。

新町に来た紅葉を案内したのが、山本半蔵（はんぞう）氏（山本家現当主・山本修巳（よしみ）氏の祖父）でした。この頃、佐渡に文人墨客が来ると、半蔵氏らは仲間で滞在費を負担することにしており、その代わりに、文人らは書画などを書いても揮毫料をとりませんでした。半蔵氏が紅葉から書いてもらった短冊が二枚、山本家に残っています。うち一枚は紅葉が真野御陵を参拝した日の夜に作った句「松風をいたゞく汗の額かな」で、平成二（一九九〇）年にこの短冊をもとにして真野公園内に句碑が建てられました。紅葉が来ていた日は新町十王堂の浪除け地蔵尊の縁日で、半蔵氏は紅葉を誘って見物に出かけました。ここで見た「のろま人形」の素朴な人形のしぐさを気に入った紅葉は、懐から紙きれを出し、矢立で「野呂松がのそりと出たり夏の月」と書き、「山本さんこんな句ができましたよ」と言って笑って見せました。即興的なものだったので紅葉はすぐこの紙片をまるめて捨ててしまったようですが、半蔵氏は佐渡の人形を詠んだ句として興味深く、忘れることができませんでした。のち、昭和五（一九三〇）年に新町の有志たちの間で、この句は『紅葉句集』にも載っていないし、佐渡の人形を詠んだものとして興味深いから句碑として残したいという話になり、この句を直接聞いた半蔵氏に揮毫を依頼しました。この句碑は佐渡市真野新町の集落開発センター前に立っています。

紅葉はほかに、窪田の海岸や沢根、相川の鉱山、小木にも寄りました。小木には十日間ほど滞在し、「月涼し橋かけたやと歌ひつゝ」の句を残しました。昭和十二（一九三七）年に小木の城山公園にこの句碑が建つときには、紅葉の妻・喜久（きく）を招いて除幕式が行われました。このように、佐渡の人々は、海を渡って訪れた文化人を温かく迎え、彼らを慕い、島内ゆかりの地に文学碑を建てています。

紅葉は、短い生涯に旅をすることがほとんどありませんでした。佐渡の旅について書きながらさらなる飛躍を目指しましたが、佐渡での療養の四年後、明治三十六（一九〇三）年に三十五歳で亡くなりました。

●展覧会情報

企画展示
「佐渡を訪れた文化人―山本家コレクションより」
会期：4月3日(金)から7月5日(日)
休館日：月曜日(5月4日は開館)・5月7日(木)

●関連イベント

講演会「文化人が見た佐渡―山本家と文化人たち―」
佐渡を訪れた文化人の案内者として、山本半蔵氏・修之助氏・修巳氏が3代にわたって果たされた役割や、文化人と佐渡の人々の交流などについて、山本家12代当主・山本修巳氏からご講演いただきます。
講師：山本修巳氏（地域紙『佐渡郷土文化』主催、佐渡良寛会会長、佐渡俳句協会会長）
日時：6月4日(木) 午後2時～ 3時半　会場：新潟日報メディアシップ6階ナレッジルーム
事前のお申し込みが必要です。詳しくはにいがた文化の記憶館(☎025-250-7171)までお問い合わせください。

山形在住でありながら活動的に全国各地を巡り、
俳句を通してイタリアのボローニャ市とも
交流のある「銀化」同人武田菜美さん。
俳句が磨かれる様をつぶさにご覧ください！

俳句添削講座

工房5・7・5

武田菜美

推敲の第一歩は「舌頭に千転せよ」（芭蕉）、つまり声に出して読んでみることです。俳句は五七五の定型詩、即ち韻文（言葉の配列や音数に規律のある詩の形式）です。声にして美しく響きますか。目を閉じて聞いてみましょう。文字に頼らなくても句意が伝わりますか。この二点を確かめてみましょう。私達は文字を識るよりも遥か昔から声に出して歌を詠み、心と心を通わせてきました。「目の誤りを耳が正してくれる」とも言われています。耳の力を信じて俳句に磨きをかけましょう。投句の前にそっと声に出して読んでください。

冬霧まとふ神殿の太柱

トータルでは十七音ですが、七五五で頭でっかちな句となっています。文字で確かめては気づきにくいことですが、耳で聞けばバランスの悪さに気が付きます。このように五七五のリズムを破る詠み方は破調と呼ばれ、作者の心の揺れなどを表すには打って付けのレトリックですが、原句ではいかがでしょうか。「霧」から心に霧がかかるかのように、どこか不安な印象を受けます。このような時こそ、お社の柱にはすっくと立ち続けて心の支柱となっていただきたいものです。

冬霧の奥に社殿の太柱

大根引き引いたもの手で貰いけり

「一本持っていきな」と手渡された採りたての大根のみずみずしさと畑の土の匂いまでもが伝わってきます。しかし大根引きと引いたもの「hi」の響きが耳に残って、大根の手応えに心を集中することができません。大根引きは大根の収穫作業、手に受け取ったのは大根そのものです。まずはここから整理しましょう。大切なのは大根です。次に、何かをいただく時は手で受け取りますので作中の手は省くことができます。採りたての大根の泥をささっとしごいて貰ったのではありませんか。もちろん青々とした葉をつけたままで。

大根を葉っぱもろとも貰いけり

来し友と秋の夕暮れ惜しむかな

kisitomoの母音「i」の鋭さが耳にささります。友人と一緒に時を過ごしているのですから、来しの説明をもっと効果的な表現に言い換えて句に深みを出してみましょう。加えて秋の夕暮は釣瓶落しと言われるようにあっという間に暮れてしまいます。久しぶりに会った友人と過ごす時間はどんなにあっても足りないはずです。秋の一日を惜しみながら語りあったのではありませんか。

遠くより友来て秋の日を惜しむ

銀杏のはぜて翡の色映えし

まず翡にみどりの読みはありません。翡（ひ）はっとするような鮮やかな羽の色を言い、かわせみの雄を翡、雌を翠（すい）と表します。翡翠（ひすい）（宝石）のような青緑色や草や葉の汚れのない色を表すには翠（みどり）を使います。音と文字の使い方のどちらにも注意を払ってください。堅い殻を剥いて、目にした美しさを翡翠に例えてはいかがですか。

銀杏を剥いて翡翠を取り出しぬ

時くれば母恋ふ日なり曼珠沙華

一句を読むのに七、八秒もあれば十分です。逆に言えばこの短い時間で耳は句の意味を理解しなければなりません。これが世界一短い詩・俳句の宿命です。時くればには時が来たのでの条件と、時が来ればの仮定の両方の意味があって耳を混乱させてしまいます。ここを正すには、

曼珠沙華咲いて母恋ふ日となりぬ

猿（ましら）のごと柿捥ぐ夫や喜寿を過ぎ

猿（ましら）の響きと柿を捥ぐのインパクトが強く猿が柿に群れる情景に心をうばわれて、大切なご主人様の印象が薄れてしまいます。喜寿を過ぎてもなお身軽に働く姿を韻を踏んで表してみましょう。kijuとkakiのka行にkibikibiのリフレインでka行プラスkiの母音iを揃えてみてはいかがですか。

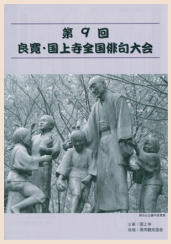
喜寿過ぎの夫きびきびと柿を捥ぐ

NEWS あ・れ・こ・れ

野菜のポストカード 横書きバージョン登場

ご好評をいただいている季節の野菜が12枚入った野菜のポストカード（送料込み1000円）。「横書きがほしい」というお客さまの声を受け、このたび横バージョンが新登場！ 今回は「ほうれん草」を同封しました。外出もままならないこんな時こそ、ちょっとした一言やお便りは格別にうれしいもの。ご自身のお便りに、プレゼントにとご活用ください。ご注文は同封の振込用紙をご利用ください。その際、縦書き、横書きのご希望も併せてご記入ください。

本年の良寛・国上寺俳句大会はありません



例年9月の秋分の日周辺に行われ、本誌でもご案内している「良寛・国上寺俳句大会」。国上寺では12年に一度の「御本尊御開帳」が新型コロナウイルスの影響で9～11月に延期されることから、本年の「良寛・国上寺俳句大会」は中止となります。

橋本世紀男さんの川柳が文部科学大臣賞を受賞!

2017年、当社にて『五七五は命のリズム』を上梓した東京都の橋本世紀男さんの作品が、ＮＨＫ学園生涯学習フェスティバル（全国・各地での川柳大会）の全大会大賞の中から、最も優秀な作品に贈られる「文部科学大臣賞」を受賞しました。

受賞作　私だけ読める日記の余白です

3月27日の受賞式は新型コロナウイルスの影響で中止になりましたが、表彰状が宅急便で届いたとのこと。「各種俳句大会や会合、旅行が中止になり、残ったのは病院の検査だけ。手洗いとうがいを励行し、人ごみはなるべく避け、夜は霧島焼酎で身体の内部をしっかりと消毒しています」とのこと。橋本さんを見習って、ユーモアで乗り切りたいものです。

▲文部科学大臣賞を受賞 橋本世紀男さん

ご来社ありがとうございます

2013年、2014年に当社で句集を作られた群馬在住の有井大典さんが、現在制作中の句集の初校を携えて来社されました。先の2冊と今回も日本語の俳句と見開きで、英語俳句が掲載されており、当社に来てからも「この表現の方がいいかな?」と、頭をひねっていました。有井さんの場合、英語俳句でも一行3words×3行=9wordsという制限を設け、ご自身で「Hi-9」と命名して取り組んでいるとのこと。「17音と同様に9wordsという制限があるからおもしろい」とおっしゃっていました。家にこもりがちな今、こんな頭の体操もおもしろいものです！ コロナ禍がおさまりましたら、皆さまもどうぞお気軽にご来社くださいませ。

▲9wordsの「Hi-9」を提唱する 有井大典さん

スタッフの一言　Q. 私が使っているこんな便利なもの

木戸　敦子

マスキングテープ。市から配布されるゴミの年間カレンダー。玄関の靴箱のところに貼っているが何度も剥がして利用できるので、現在3年目。何年使えるか長期にわたり実験中。

古川久美子

長年愛用の手帖。年が変わる度に中身を新しくして使っているのですが、1年間の自分の行動記録と、思い出を振り返るのに役立っています。

菅　真理子

蓄熱式の湯たんぽ。お湯を入れなくても、コンセントに差すだけで湯たんぽが出来上がる。毎冬の必需品です。あとはアイラップ（耐熱ポリ袋）ですね！ これがないと困ります。

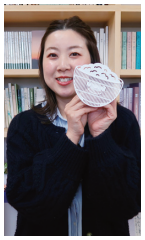
松野　沙依

百円均一で買ったターナースプーン。大きなスプーンみたいなもので、おたまのようにすくうことも、フライ返しのように炒めることも可能！ 欠かせないキッチン用品です。

山田　民子

旦那様！！ものではありませんが、非常に役立っています。

木伏芙美恵



お米を研いでお水をきるとき勢い余ってお米を流してしまうのをストップする「米ピタクリップ」。お米を無駄にしない！

上村眞智子

これは折りたたみ式のじょうごです。グループ会社であるGiHのスタッフが使っているのを見て100均で買いました。飲み物をペットボトルに移すのに毎日使っています。

石山由希子

部屋干し用の洗濯ロープです。編み方に工夫があってハンガーを差し込めるようになっています。ずれない＆落ちない。伸びちゃってたわんでいますが大活躍！

吉田　瞳

Fire TV Stickのアレクサです。Alexa対応音声認識リモコンで、話しかけるだけで観たい映画や番組を探してくれる。休校中わが家では大活躍！

佐々木祥子

洗顔用泡立て器です。少量の洗顔剤と水だけで生クリームのような滑らかでもこもこの泡が簡単に作れます。母と一緒に使用していますがとても便利！

首

黒岩徳将

身体のどこか一部を織り込んだ俳句についての試論、2回目は「首」。首が回らない、首がつながる、首にする…と「首」はスリリングな慣用句が多いように思う。次回もどこの部位に関して俳句とともに魅せてくれるのか、首を長くして待ちたい。

●プロフィール
1990年神戸市生まれ。東京都在住。
「いつき組」所属、「街」同人。現代俳句協会青年部副部長。

首そのものを詠んだ句は少ない。「首」だけを提示すると、「頭や体はどうした」と思わせてしまう。つまり、首は接合部である。かといって動詞を用いて映像的に表現するというのは「首をどうこうさせる」ことであり、そのような発想で句作をスタートすることも。一般的には少なそうだ。

首たてて海を見にゆく秋の風　　寺田京子

猫背という言葉があるが、「猫背」を猫背たらしめるのは、背の動きもさることながら、地面に対する首の角度なのではないだろうか。スマートフォンをはじめとする電子機器の普及により、現代人の生活において首・肩の負担は避けることのできない課題である（と、PCをタイプしながら自分の首を傾けすぎないように正す）。

もっとも、健康上の留意が京子句のテーマではない。秋風ふきすさぶなか、海を見に行かなくてはならなかった事情や決意があることが「首たてて」で想像させられる。京子が結核により療養生活を強いられていたという背景を抜きにしても、この句は力強い。秋は情緒的というよりかは、人間の生き様を示すための背景として働いている。「背を正し海を見にゆく秋の風」では改悪になってしまう。なぜなら、「背」にはそもそも「気持ちを引き締める」などという慣用句的意義が張りついているからであり、「首」にクローズアップすることで肉体の生々しさが強調される。付け足すならば、「秋の海」ではなく、「秋の風」と句末を着地させることで、「秋の海」を見に行く際の風の質感が浮き彫りにされている。

2019年、『寺田京子全句集』が刊行された。現代俳句協会青年部では2月に京子全句集を読む勉強会を開催した。京子句を読み通すと、「青鬼灯つねに小声にわれのうた」「たんぽぽに水ぶちまけ入院始まりぬ」「樹氷林咳をするとき身のひかり」といった、万象を自身の五感や肉体にひきつけた俳句を連ねるさまに、息を呑まざるを得ない。身体を詠むことは、自己をさらけ出すことにつながる。もう一句、「首」で思い出すのは次の句である。

怒らぬから青野でしめる友の首　　島津亮

「怒らぬから」は「友」と主体の関係性を表す言語的演出と言える。映像的ではない。殺そうとしているのではなく、犬の甘噛みのように戯れているのだろう。首をしめることによって、主人公と友は青野の中で一体化する。そこにあるのはエクスタシーだ。「しめる」に漢字が使われていないのがなまめかしい。夏野でなく、「青野」というのもひねりがあって面白い。絞められた首の色がどうなるのかは絞め方にも依るだろうが、世界全体が甘美な「青」で埋め尽くされそうだ。首は接合部であり、首からエネルギーが世界へ溢れ出す（余談であるが、先日友人2人から「島津亮の句をいろいろ読んだが、青野の句と〝父酔ひて葬儀の花と共に倒る〟の2句しか良い句がない」という全く同じ内容の話を耳にし、とても驚いた。確認が必要である）。

小綬鶏の首の橙より鳴けり　　徳将

2020.4-5. vol.109（2020年4月10日発行／隔月発行）
●発行・印刷／株式会社ミューズ・コーポレーション
喜怒哀楽書房 株式会社 ミューズ・コーポレーション
〒950-0801　新潟市東区津島屋7-29
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
0120-819-395 Facebookもチェック
e-mail odp@eseihon.com ／ HP http://www.eseihon.com
郵便局口座番号00530-4-81370 口座名 株式会社 ミューズ・コーポレーション

編集後記

「喜怒哀楽」の前号を編集していた1月中旬は日本で感染者が1、2人出た頃だった。それが今やロックダウンが囁かれるほど新型コロナウイルスが猛威をふるい、誰もが日々不安にさいなまれている。オリンピックがよもや中止または延期になるなどというシナリオを誰が描けただろうか。「一寸先は闇」という言葉がただの慣用句ではなく、現実なのだと今は実感している。本誌もその影響を受けた。誌面でのささやかな交流しかできないかもしれないが、一助になれば幸いだ。早くあの人にもこの人にも会いたいなぁ。（木戸敦子）